

先輩から学んだ助産所経営学

正木 かよ

正木助産院(大阪市)

地域での活動年数は私の方が長いのに、いつも私より先輩のように思えてしまう、石塚和子先生からのバトンを受けました。

自分の生き方が見つかった時に

自分が変わる

私が今なお、地域で妊産婦の信頼を全身に受けながらいきいきと生きていられるのは、10年先を見越した生活習慣をもっていたからであろう。

助産婦学校を卒業して、何の迷いもなく母親業を夢みて結婚生活に飛び込んでいった私に、案外早く人生設計図を書き変える時がきた。

そのきっかけは、子育ての真最中にふと見えてしまった私の老後の姿であった。それは日だまりに背を丸めてとても淋しそうに座っている老婆の姿であった。あーいや、子育てが終了後も何かに燃えていたい。生きているという手応えがほしい。

それなら何をしたらいいのか。取りあえず手持ちのライセンスの中から定年のない開業助産婦を選んでいたのである。当時、地域でりっぱに自立をしていた先輩助産婦の影響が大きかったと思う。

しかし開業助産婦が1校区内に1～2名は活躍していた時代である。開業したばかりで、くちばしの色も変わらないヒヨコに命を預けてくれる人はそうはいない。それなら地域でしっかり根を張るのに10年をかけよう、とにかくここに助産婦ありと「のろし」だけは上げておかないと、と開業したのは1961(昭和36)年であった。

計画通り10年後には、地域におろした根はしっ

かりと張り、自転車で走っている後姿にも声をかけてもらえるほどの信頼が得られるようになっていた。勇気をもっていちはやく人生設計図の書き替えをしてよかったと思う。

技術は目で学び体で覚えていくもの

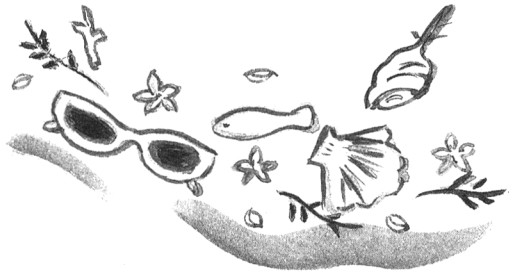
32歳という、人間的にも技術的にも未熟な状態で地域に飛び出した私は、10年間を子育て、助産業務、自己研鑽の期間とした。その間機会があれば助産所のわたり歩きも積極的にした。

先輩の技術を見学させてもらえるまでの関係をつくるには、ずいぶん努力もした。それほど自分のもっている特技は地域で生きていくための大切な武器であり、宝なのだ。そう簡単に他人には教えられなかったのであろう。

当時、骨盤位の分娩介助が上手であるとの定評のあった先輩に、その技をご伝授願いたいと門を叩いたが、「あんたらに教えるものは何もあらへん」と、予想通り何回か門前ばらいにあった。しかし、これ位で引き下がるものかの精神で私が言った「先生、医師からの信頼もあって骨盤位の産婦を紹介される程のすばらしい技術を、後輩に伝えないで持って死ぬんですか。もったいないと思いませんか」の言葉に師はついにチャンスを与えてくれた。

「骨盤位分娩があるよ」の電話で私は家を飛び出した。先輩の一挙一動を見逃がさじと、特に手元は穴のあくほど息を殺して見つめていたことを懐しく思い出す。

そこには骨盤位分娩だからという緊張感もなく、まるでスローモーションの映画でも見ている



ようにゆっくりと進む自然経過を見守っていた。それが臍部の娩出と同時に急に場面が一変して、フィルムの早送りを見ているように、上肢、児頭娩出。それは、鮮やかという言葉が似合う一瞬のうちのできごとであった。そして、何回か見学するうちに、骨盤位分娩も怖いと思わなくなっていた。

技術を学ぶということは、いかにまね上手になるかだと思う。正確にまねをくり返している間に、やがて自分のものとなっていくものである。

現在、私の技として確立しているものは、長年にわたって先輩から学んだものに更に自分の工夫が加わったものであるが、「技術とは心である」といいたい。

助産所の経営学は自立の基本

開業して3年めにしてやっと月1～2例のお産の手伝いができるようになった頃、地域の先輩から共同助産所をやらないかの声がかかった。これからは、幅広い看護の提供をしたいと思っても1人では限界があると思っていたので、その話には飛びついた。

結果的には、5人で始めた共同助産所も、先輩たちとの間に助産所の主旨について食い違いがあり10か月で開散してしまい、また自宅での営業となった。しかし、短かい期間であったが、私は教科書では学べない多くの助産技術と助産所経営学を学んだと思っている。

物のない時代を生きてきた人たちは、無駄に関してはそれなりの理念をもっていた。物にも命がある、その命をいかすという精神こそまさに、い

つも生命と向き合っている助産婦の心そのものである。

例えば、褥婦が退院した後のシーツのつけ替えの時に使用していた綴じ糸は、私にしてみればもうお役目終りの不用品で、スーッと抜いてごみ箱へ丸めてポイと捨てていた。それを見ていた先輩が、「ちょっとちょっと、綴じ糸は長いまま抜いておけば次のシーツを綴じ付けるのに使えるやろ。そうして何回でも使えるやろ」。ケチやなーと心の中でつぶやいたのは私も当時若かったのであろう。

確かに糸がだんだん短くなって使用できなくなるまでには糸も10回近く働いていた。それほど活かされた糸は、さぞかし満足していたことであろう。

一事が万事であったが、助産所の経営とは、ということを考えさせられた。

ケチと無駄づかいをしないことは根本的に異なる。井勘定しかできない私も時々思い出して鉢巻きのしめ直しをしなければと思うと同時に、何でも使い捨ての消費時代に育った現代の親になる人たちに向けても、物を大切に作る心と資源を未来の人類のために残していくことの意義を、両親学級で話し続けていきたいと思う。

* * *

次のバトンは、金沢で開業している頼玲瑛さんに渡します。

「石の上にも3年」。3年たてば開花も近いでしょう。がんばって下さい。苦勞しているのは自分1人ではない、いつの時代も助産婦は頑張っている、このことを胸にして。